

II 高齢者支援局

(I) 高齢者支援局 事業報告

平成 29 年 5 月吉日
社会福祉法人 大三島育徳会
高齢者支援局長 田中 雅英

1 施設サービス部

施設サービス部の事業活動収支合計は、プラス 32,899 千円のプラスだった。特養博水の郷においては、入院による空床が 729(前年度 1,179)、退所による空床が 378(454)、合計 1,107(1,633) だった。空床利用は 206(376) であった。わずかに総空床 1,000 を切ることができなかったが、利用率は昨年より 1%改善し、97.3%だった。4 月、5 月、3 月(29 年)の入院の影響が大きかった。退所による空床が総空床の約 35%を占め、入・退所のベッドコントロールに課題が残った。一方、感染症については、インフルエンザの集団感染は防ぐことができたが、12 月～3 月まで職員の発病者が断続的に続いた。そのため、ショートステイの受け入れを抑えざるを得ず、利用率が 100.6%にとどまった。サービスの低下に結びつくことがないよう職員の感染症対策を徹底したい。

2 在宅サービス部

在宅サービス部の事業活動収支の合計は、マイナス 9,607 千円となった。平成 27 年度の大幅な介護報酬削減への対策が追い付かず、厳しい結果だった。ただし、小規模事業所である「喜多見だんちデイ」と「タガヤセ大蔵デイ」は共に黒字を確保した。合わせて、3,518 千円のプラスだった。職員の奮闘に感謝したい。博水の郷デイについては、機械浴槽の購入(約 5,700 千円)の影響が大きく、マイナス 12,541 千円だった。居宅介護支援事業所「博水の郷」では、特定事業所加算の取得により 2,026 千円のプラスだった。訪問介護事業所「二子のわたし」は全都的な訪問ヘルパー不足の影響により、3,150 千円のマイナスを余儀なくされた。

3 地域包括支援部

「あんすこ」では、「総合相談支援」をはじめ、「権利擁護業務」、「認知症ケアの推進」などで地域包括の核となる事業所としてさまざまな成果を残している。たとえば、総合相談支援では地域内の団地における見回りパトロール隊を組織化した。メンバーは地区社協、商店会、町会、自治会、ボランティア、当法人などである。認知症ケアについては、地域の小・中学校に認知症ケアの必要性を啓発し、瀬田中学校 3 年生(計 120 名)を対象に開催した。次期指定管理者のプロポーザルに向けての取り組みが進んでいる。

4 総務・事務部

昨年度に引き続き人材確保に迫られた。高齢者・障害者支援局あわせて年間で 19 人が退職し、20 人が入職した。介護・支援人材対策室と協力して職員の補充に努めた。東京都高齢者福祉施設協議会のアンケート(2017 年 4 月時)によると、平成 29 年 4 月における「介護人材充足状況に与えた影響についてたずねたところ、「施設独自の人員配置基準を満たしていない」が 62.7%、「必要な介護職員の新規採用ができていない」が 60.3%だった。また、人材不足の対策として「派遣(紹介・紹介予定を含む)職員の採用」が、68.8%だった。博水の郷は年間を通して派遣に頼ることなく人材を確保できたことは、人材対策室と総務・事務部の尽力によるものと評価したい。

(Ⅱ) 施設サービス部 事業報告

施設サービス部長 坂井祐

平成 28 年度の施設サービス部は特に効率的・効果的な事業運営に取り組んだ。法人の基幹施設として、安定した収益を得なければいけないからである。ご利用者へのサービス向上のために様々な対策を講じた。

各重点項目における報告は以下のとおりである。

1 人材確保・育成・定着

人材確保について、人材対策室と協働して行った。具体的には人材対策室メンバーである介護長が率先して就職フェアに参加し現場の様子を伝えることで、就職希望者の安心感に繋がり、人材確保につながった。また、現場のサブリーダーを務める職員が、東京都社会福祉協議会が設立した東京ケアリーダーズに参加し、介護の魅力を社会にアピールしている。

育成と定着についての取り組みとしては、まず、研修委員会による内部研修の充実を図った。年間で 19 回の内部研修を実施した。今年度は今後、重度化が予想される入居者に適切なサービスを提供していくうえでスキルアップにつながる研修に力を入れた。

内部研修では外部の研修で得た知識やスキルを他の職員に伝えることで自らの成長につなげる。職員の定着には自分の能力向上やキャリアアップを実現する職場環境が必要である。

また、近隣施設との交換研修において内容の充実を図った。昨年度は喜多見ホームと砧ホームの 2 施設との実施であったが、今年度は新たにエリザベト成城も参加することになった。自施設の接遇の良さを複数の施設から評価されたので、さらにレベル向上を目指したい。

来年度も個人の育成計画をもとに効果的な人材確保・育成・定着を実施していくものとする。

2 効率的・効果的な事業運営

特養の空床ショート利用込の利用率は昨年度の 96.2%から 97.3%と 1.1%の増加となった。目標 98%には 0.7%届かなかった。

28 年度の特養総空床は 1107 床であった 27 年度の 1633 床から 526 床減らすことができた。そのうち退所による空床は 378 床となっている。27 年度の 454 床より 76 床減少することができた。しかし、28 年度の退所者は 24 名と 27 年度の 34 名から 10 名少ないため、1 名あたりの退所による空床率は上がっている。来年度も引き続き、退所から入所までの期間を短くすることを徹底していく。

入院による空床は 729 床と 27 年度の 1179 床から 450 床減少した。

要因としては、年度の初めより各ユニットに経口補水液を常備し、水分補給量の少ない方や体調不良の方には積極的に使用した。また、口腔ケア及び陰部洗浄の徹底を各委員会から啓発し、内部研修に盛り込んだ。結果、脱水、呼吸器感染症、尿路感染症の予防となり、入院者の減少となったと考える。来年度も同様の取り組みを続け、利用者の体調管理に力を入れていく。

ショートステイの利用率は 100.6%と昨年度の 112.7%より 12.1%と大幅に減少してしまった。原因としては定期利用をされていた利用者が入所や死亡により空床が多く発生したことが考えられる。また、新規利用者の継続利用率が年々低下している。対策とし

て、営業活動を強化し新規利用者を確保する。送迎サービスの創設も検討する。

グループホームの入所の利用率は97.7%と昨年度の96.0%より1.7%増加となった。要因としては、入所者の入れ替わりが1名であったことと、入院は0名であったことが挙げられる。その他の空床は外泊によるものであった。引き続き、デイサービスを利用している入所希望者に対し、事前に契約内容及び重要事項の内容を説明し、退所発生後、直ちに入所していただく準備を徹底する。

一方、認知症対応共用型デイサービスにおいては32.4%と昨年度の18.8%から13.6%増加という結果であったが、まだまだ改善の余地がある。登録者は増えるが、入所などにより利用を終了してしまう方も多く、安定した稼働率を確保することができなかった。対策としては、登録待ちの方がいる状況を作るよう営業活動を強化していく。

今年度の結果をしっかりと分析し対応策を練り、「入院者が想定より多かった」「想定以上に退所が続いた」などの想定外を減らし、次年度の運営を行っていくものとする。

3 地域公益活動の充実

地域公益活動室の実施する地域における公益的な取り組みに積極的に参加した。社会福祉法人における「地域における公益的な取り組み」が責務となったからである。

具体的には、地域公益活動室が募集する公益活動に職員を派遣した。特に博水の郷として行う、挨拶運動や多摩川を楽しむ会には参加者が多かった。

また、今年度は地域との連携強化に力を入れた。近隣町会の鎌田南睦会の主催する盆踊りの設営・撤収の手伝いへの職員派遣や、喜多見区民まつりで相談ブース開設などを実施した。

課題としては、参加者の増加である。もっと多くの職員が地域における公益的な取り組みを理解し、参加していくことが必要と考える。

来年度も近隣地域の行事に積極的に人員を派遣していくものとする。

1. 介護課

(1) 介護課 事業報告

介護課長 片桐 恵子

28年度は、人材育成に力を入れて取り組んだ。介護は専門的な知識、自ら判断し行動できる力などが必要と考えるからである。経験者の確保は厳しいため、未経験者を育成しなければならない。そのために、業務内容を理解しやすいよう工夫した。具体的には、身体介護業務と生活支援業務に分けた。まず、生活支援業務を、次に身体介護業務を習得するようにした。その結果、介護の仕事を理解する期間を短縮することができた。来年度は、もう少し細かく習得段階を分け次の目標を明確にしていく。

今年度は今後のリーダー候補となり得る人材育成を目標としていた。

しかし、新人職員や中堅職員の育成に偏ってしまい、目標を達成することができなかった。29年度は再度、リーダー候補の育成に注力していく。

29年度に介護職員処遇改善加算が5.9%から8.3%となり、介護職員の給与が上がる。モチベーションの向上になり、人材確保のうえでも良い影響が期待される。反面、介護職員に求められる期待も大きくなるだろう。来年度以降は、より専門性を発揮し、期待に応えるサービスを提供していかなければならない。

今年度は3名の介護職員が入職した。現在は全員が自立して業務を遂行している。一方、新人職員が関わる事故が発生している。薬に関する事故や転倒事故である。この場合、新人職員だけの過失にとらえず、チームとしてサポートできていないと考える。ユニットごとにチーム力の強化を来年度の課題とする。

各重点項目における報告は以下のとおりである。

① 介護人材の育成と定着

今年度は内部研修の内容を見直した。具体的には、まず視覚から理解を得やすいようにパワーポイントの使用頻度を増やした。次に自らが考える力を身につけられるようにフリーディスカッションを行った。

新人職員の教育期間に長い時間を費やすことが例年の課題である。今年度はマンツーマンでの教育期間を短くし、業務を自立した後、先輩職員がOJTするという形にした。ところが、現状の職員のレベルでは自立した後も、他職員へのフォローまでできないという課題が見つかった。来年度は、指導する側の職員の育成に注力する。

一方、リーダー層の育成に手をつけることができなかった。現リーダー、サブリーダーの指導力向上が全体のレベルアップに不可欠であるため、来年度は、個別面談や研修を活用しリーダー自覚できる場を設ける。

今年度はキャリアパス制度の充実を図れなかった。来年度は一人ひとりが明確に目標を持つことができるシステム作りに注力する。

② 利用者の生活の充実とケアプラン

ケアプランの書式を変更した。具体的にはアセスメント部分の課題分析項目を見直し、書式も見やすい様に変更した。

アセスメントを整理したことで、ご利用者の課題をあげやすく、より適切なケアプランを作成することができるようになった。入所前の面接シートを新ケアプラン書式と同じ課題分析項目に変更した。今までは入所前、入所時、入所後と、違うアセスメント表を使用していたため、重複して書き直す手間がかかっていた。同じアセスメント表を活用することで、作業時間の効率化を図れた。

29年度の課題として、まず、作業手順の見直しと多職種で作業の分配の見直し実施する。次に従来、業務時間外に行っていたカンファレンスを業務中にカンファレンスの時間を組み込む。効率化を図るためである。

ケアプランにご利用者のニーズを取り入れ、個別の外出を増やした。外出するためには職員の手が必要となり、回数を多くすることは難しいが、シフトを調整し、今年度は4件実施することができた。来年度は実施回数を増やせるよう、業務改善していく。また、遠出が難しいご利用者にも、ベランダや屋上の散歩など外気に触れる機会を増やしていく。

③看取りケア

今年度は、24名の退所者のうち10名の看取りケアをおこなった。前年度の看取りケアは32名中12名であったので、看取りケアの割合としては昨年とほぼ同じであった。看取りケアの経験を積んだ介護職員が後輩に対してOJTをする機会も増えている。

ご家族の心情に寄り添うことや、ご利用者が安心できる環境を整えることなど、きめ細やかなケアを行った。また、看取りケア開始時に、生活相談員やケアマネジャーが、老衰に至るまでの状態変化やサービス内容を説明することにより、ご家族に安心してもらった。

課題として、看取りケア終了後、事例ごとの振り返りができなかった。行った効果や反省をし、次に活かすことが見取りケアの質を高める。来年度は、他職種が集まって振り返る時間をつくる。

今年度の入所者のうち10名が1年未満に退所となっており、うち5名が看取りケアにより亡くなっている。つまり、看取りケアを目的とする入所が増えたということになる。看取り目的の入所の場合、在所期間が短く、ご家族との信頼関係が築かれていないため、意思の疎通が図りづらい傾向があるが、よりていねいに看取りケアを説明することで、安心感を持っていただいた。

(2) 機能訓練

介護課長 片桐恵子

28年度は、理学療法士（以下PT）が、1名になり、利用者1名に対する介入時間が大幅に減った。PTが介入せず相談のみのケースも多い。平均的に時間を分配し、優先順位に沿って介入することに注意した。

在宅時に長時間臥床していた方や、医療機関からの入所された方が多く、ADLが低い状態で入所してくるケースが多い。入所後に、離床時間を増えたことでADLが上がるケースもあった。また、自宅で老衰と診断され、看取りケアが目的で入所するケースもあった。しかし、機能訓練指導員の助言により、入所後は状態が回復するケースもあった。

食事・入浴・排泄の三大介護に追われ、できるだけ残存機能を発揮させる生活リハビリが十分にできない場面が多かった。なぜなら、見守りには、介助するより時間がかかるため、必要であっても全員に実施することは難しい。業務内容を見直し、できる限り残存機能を活かすケアを実施していく必要がある。今年度から来年度にかけてアセスメント表を変更する。これを機に改めて、介護職員が適切なアセスメントを実施し、それに応じたケアを選択できるようにスキルアップを目指す。

《業務報告》

- ① PTによるリハビリの実施
- ② PTによるケアワーカーへのアドバイス（生活リハビリなど）
- ③ ケアプランを中心とした個別リハビリの実施
- ④ 作品展に向けての作品作り・準備
- ⑤ 福祉用具に関するアドバイス

《個別で行っているプログラム内容》

- ・ 関節可動域運動
- ・ 車イス駆動練習
- ・ 車イス乗車時の姿勢の調整
- ・ 筋力増強
- ・ ベッド上での姿勢の調整
- ・ 立ち上がり・立位保持練習
- ・ ストレッチ
- ・ 歩行（応用歩行）練習
- ・ 座位保持練習
- ・ バランス練習
- ・ 浮腫に対するマッサージ
- ・ 起居動作練習
- ・ アクティビティ
- ・ 足浴

(3) ユニット報告

① 2Fゆり・ばらユニット

リーダー 木村 元

i) 人材育成について

利用者のケアに対して、職員間で意見を出し合い現状に見合ったケアの提供ができたが、同じ利用者に対して同じようなシチュエーションでの事故を再発させてしまうこともあった。同じことを繰り返さない危険予測を改めて意識しなくてもできるようにしていく必要がある。

利用者の要介護度が高くなり、看取りを行うケースが増えている。利用者、家族共に安心して最期の時を迎えてもらえるような支援も少しずつ出来るような関わり方が出来るようになった。

ii) 効果的・効率的な事業運営

水分摂取量の確保や身体の清潔保持の取り組みを行うことで、尿路感染や肺炎、脱水による入院が少なく、インフルエンザやノロウイルスといった感染症なども起こさなかった。

iii) 地域公益活動の充実

残念ながら、今年度において地域公益活動への参加はできなかった。次年度においては参加できるようにしていきたい。

② 2Fもも・たんぼぼユニット

リーダー 杉田 雅治

i) 介護人材の育成

ユニットの職員に個々の能力に応じたものや希望の研修に参加して、介護サービスの向上に努めた。

昨年度までは内部研修の講師はユニットのリーダーがやっていたが、今年度はユニットに所属する職員が講師を担当することにした。そして、ユニットの職員が講師を行うにあたり、リーダーがスーパーバイズすることで、担当した職員が研修内容を自分から考え、学ぶという教育的効果を狙い職員の能力の向上を図った。

ii) 効果的・効率的な事業運営

ご利用者の入院者数を減らす取り組みとして、感染症対策を徹底した。流行前に感染症対策のシミュレーションを行なった。また、感染症を出さないために居室の換気や加湿、食後の口腔ケアを丁寧に行なってご利用者から感染症を出すことはなかった。

安全な業務遂行ができるように日々のご利用者の行動観察を細やかにを行い、一人一人の個別ケアを実践するべくユニット会議で話し合いをして、対応を検討していった。

③ 3Fすみれ・さぎそうユニット

リーダー 新田 正伸

i) 介護人材の確保、育成、定着

ユニットでの取り組みとして、新人職員や異動職員に対して、ユニット内の教育方針をもとに、エルダーが指導内容と育成状態を構築し情報共有することで、ユニット全体で職員を育成することができた。

また、新たな取組として入社2年目の職員をエルダーとして指導係にしたことによって、責任感と達成感を学ぶ機会を作ることで、エルダーと新人共に成長する環境もつくることができた。

また、内部研修に関しては、施設研修以外にユニット内での虐待防止について、内出血予防、対策など意見交換、学びの機会を設けた。

こうした研修を行った一歩で原因不明の内出血、服薬の事故などが続いた為、ユニット全体での介助技術の向上、定期的な見直しや確認を継続していくことが課題だ。

ii) 効果的・効率的な事業運営

業務内容の見直し・利用者の体調管理については、ご利用者の陰部洗浄、口腔ケアを従来以上にこまめにおこなった。

フローア居室の温度、湿度、細目な換気、水分補給などご利用者が過ごしやすい環境と健康な状態を保ったことで入院者を減らすことができた。

職員全員で標準予防策の励行と、感染症対策のロールプレイングを実施したことで、インフルエンザ、ノロウィルスの罹患者をゼロにすることができた。業務の見直しについては、ご利用者の生活リズムにより合わせた業務改善、環境作りなど今後必要だ。

iii) 地域公益活動の充実

多くの地域公益活動を企画については、リーダー、サブリーダーを中心に地域公益活動に参加した。

サブリーダーが東京ケアリーダーズに選任され地域内外問わず活動している。今後も継続して公益活動に施設代表として参加していく。ユニット内での公益活動、ボランティア活動に対しての関心が低い為、引き続き参加、理解を促していく必要がある。

④3F さくら・ひまわりユニット

リーダー 白鳥 美保

i) 人材の育成

ユニット内で業務の見直し、基本介助(排泄・食事・入浴)を効率的に行い、利用者個別のケアに力を入れてきた。そのため、職員個人の得意とするケアを担当利用者に提供することができた。個々の能力・長所を活かすことを重点的に意識して育成した。その結果、積極的に研修に参加する職員や居室の整理整頓に力を入れる職員、散歩を多く行う職員などそれぞれのケアの質が向上した。

ただ、職員によるサービスの差も顕著になり、ユニット全体のケアの向上にはまだ改善する点が残る。

ii) 効率的・効果的な事業運営

季節に応じた体調管理が行えた。その結果、入院者が昨年と比べ減少し、稼働率の維持に貢献できた。特にノロウィルスやインフルエンザ対策を徹底し、発生時のロールプレイングや湿度管理に力を入れた。

また、自立度の高かった利用者のADLの低下が目立っているため、今までの「大丈夫だろう」という意識を変え、見守りから軽介助を行い事前に事故を防げている。

iii) 地域公益活動の充実

時間的制限と意義の伝達の不十分もあり、積極的な活動参加は出来ていない。

リーダー・サブリーダーが中心に活動していき、来期は参加できるようなシフトや意識向上に努める。

⑤ひなげし・こすもすユニット

リーダー 岩永 真祐

i) 人材の育成

新人職員が入職するにあたって、マニュアル等の見直しを行った。また、新たな新規利用者の獲得に向け、申し送りなど情報の伝達に正確性を持たせるべく意識を共有するように努めた。ただ、コミュニケーション不足によるミスは多く、日によって連携の密度にバラつきがある為、来年度はより連携を強化していきたい。

ii) 効率的・効果的な事業運営

今年度は夏過ぎから感染症対策を講じてきた。その結果、ノロウィルスは罹患者は出なかった。年末にインフルエンザ罹患者がご利用者、職員から多数出て、対応に追われたが、大きく蔓延する事なく押さえられた。また、この機会に罹患者がいた際の対応策をまとめることが出来た。

来年度は、これらの経験を元に、予防はもとより感染症が発生した際には迅速な対応で蔓延を防いでいきたい。

iii) 地域公益活動の充実

今年度は、ユニット職員から地域のお祭りの準備に参加するなど、一部では協力出来たが、ユニット全体的な活動参加までは至らなかった。

来年度はリーダー筆頭に活動していき、色々な職員が参加できるようなシフト作成や意識向上に努める。

(4) 年間行事報告

介護課副介護長 山本 伸秀

博水の郷では、毎年多くのボランティアの協力にて、行事やイベントを開催することが出来ている。今年度は法人として、地域との連携に力を入れた年でもあり、行事への協力を始めさまざまなおところでご尽力いただいた。来年度も更なる連携をとりご利用者にとっても楽しめる行事運営を取り組んでいく。

下記に書いた行事以外に、個別外出への取り組みに力を入れてきた。ご利用者からの要望を聴き「自宅が見たい」「お墓参りがしたい」「レストランで食事がしたい」その要望を外出の機会に繋げたことで、例年と違った取り組み繋がった。

また、委員会を中心とした企画も好評だった。例年入浴員会の企画おこなわれている足浴イベントに加え、手浴を取り入れマッサージとネイルを取り入れたことでくつろぎの空間を演出することができた。食事委員会の取り組みとして、夏・秋・冬で食事イベントを実施し、非日常の中で刺激になった。

今後の課題として、今年度コンサートの開催が少なかった。ADLの低下がみられるなか、参加する機会が減りつつある。音楽を楽しむイベントはとても重要と考える。様々なイベントを企画するうえで様々な状態の方でも楽しめるように工夫をしていくことが今後の課題だ。

《平成 28 年度 年間行事》

	行事	2FAD	2FBC	3FAD	3FBC	4F
6月	春の外出	秋山	芝山	番本	早乙女	石川
8月	花火	中村	石井	石原	杉本	酒井
	思い出の会	木村	杉田	新田	白鳥	岩永
9月	敬老会	秋山	嶋村	金子	芝山	石川
10月	運動会	川上	遠藤	正一	早乙女	萩ノ沢
11月	文化祭	佐藤(大) 中村	芝山 柴田	金子 佐藤(一)	塚田 柴山	初村 佐藤(勝)
12月	クリスマス会	萩沢	石井	秋田	佐藤(裕)	岡野谷
1月	元旦祭	斉藤	片野	金子	杉本	佐藤(勝)
	初詣	佐藤(大)	芝山	石原	山中	中尾
3月	お花見	木村	杉田	新田	白鳥	岩永

(5) 年間クラブ報告

介護課副介護長 山本 伸秀

今年度は、ご利用者の感染症の羅漢は確認されなかったが、昨年同様指導して頂く講師、ボランティアの方の羅漢が確認され中止になることがあった。感染症が施設内外で蔓延の危険があるなかで、今後はクラブ活動自体の内容についても見直し、講師が休んでも開催できる内容についても企画していく。

ご利用者の重度化が進む中、音楽クラブや歌クラブの活動では様々な状態の方が参加されている。今年度は、楽器を使う機会が多く、トーンチャイムや太鼓・マラカスといった手先を使い講師のピアノに合わせ演奏することで、音楽や歌を楽しむ姿を多く見ることができ、リハビリや音楽療法といった効果が期待された。

作品を制作する、絵手紙クラブや陶芸・書道といった活動では、干支にちなんだ作品や文化祭へ向け共同作品を制作し、参加者の意気込みが感じられた。

反省としては、感染症蔓延を防ぐため、参加人数が限られた中での開催が多かった。本来多くの方が参加されることが望ましく思うが、参加された方は月1回の開催を楽しみにし、ご利用者同士、講師との交流の場としての笑顔の絶えない物となり有意義なものになっていた。今後は、新規で入所された方にとって参加しやすく活動以外での交流の場としても活用できるようにしていく。

●各クラブ担当者

	クラブ	担当者			
		2F ゆり・ばら	2F もも・たんぽぽ	3F すみれ・さぎそう	3F さくら・ひまわり
1	書道クラブ	中村	柴田	金子	柴山
2	華道クラブ	佐藤（大）	遠藤	佐藤（一）	早乙女
3	音楽クラブ			番本	塚田
4	陶芸クラブ	斉藤	柴山	石原	杉本
5	歌クラブ	斉藤	伊藤	正一	柴山
6	絵手紙クラブ	川上	石井	秋田	佐藤（裕）

2. 相談支援課

(1) 相談支援課 事業報告

相談支援課長 矢野 弘枝

利用率の向上を最優先事項とし、地域福祉の充実、相談援助業務の強化、医療機関との連携強化と4つの重点目標を掲げた。

① 利用率の向上

28年度特養の利用率は、空床ショートステイ利用込で97.3%と、前年96.2%より1.1%の増加であった。前年と比較し、入院による空床数が1179床から729床と450床減少したことが要因である。特に8～10月の入院による空床数は、前年571床から61床と500床減少している。例年、夏期と冬期の入院が増えるが、通年で経口補水液を活用し、体調不良時の水分強化と脱水予防をしたこと、食後の口腔ケアの徹底、陰部洗浄による尿路感染症の予防など、高齢者の入院二大原因である肺炎と尿路感染症による入院の減少ができた。また、前年に続き、特養利用者のインフルエンザやノロウイルス罹患者はゼロで終わることができた。加えて、28年度は退所者数も23人と前年31人より減少した。退所による空床数は454床から378床と76床の減少、総空床数は1633床から1107床の減少だった。29年度は総空床数1000床以下を目標に、ご利用者の体調管理と共に、効率的な入所対応に努めていく。

また、28年度は、世田谷区の保健福祉課からの緊急一時宿泊事業でのショートステイ利用や、あんしんすこやかセンター、居宅ケアマネからの急なショートステイ利用へ対応した。ショートステイの利用率は112.7%から100.6%と減少した。原因としては介護保険料2割負担による利用控えや、他特養のショートステイや有料老人ホーム、お泊りデイなどの選択肢が増えているためと考えられる。加えて、12月と2月にショートステイフロアで、インフルエンザが発症し、利用調整があったことも利用率減少の要因となった。次年度は、緊急一時宿泊事業や保健福祉課、あんしんすこやかセンター、居宅のケアマネからのショートステイ依頼に柔軟に対応するとともに、近隣居宅介護支援事業所へ営業活動及び空床情報の提供を行い、利用率向上に努めていく。

来年度より相談支援課は産休からの復帰1名と新入職1名と2名の増員を予定している。退所による空床を減らすための入所待機面接を強化し、入所待機者常時10名確保、退所後10日以内の入所を目指す。今後約3年で、近隣の特養入居施設・ショートステイ含めて約1000床増えると言われている。特養・ショートステイ共に、選ばれる施設として、医療面の対応強化と、柔軟なサービス対応を検討していく。

② 地域福祉の充実

ご利用者の地域参加を援助し、地域のイベントに積極的に参加していった。地域社協やボランティアと連携し、博水の郷のサービスを地域へアピールすることに力を入れた。具体的なイベントは下記のとおりである。

- ・多摩川癒しの会(4月・11月)
- ・喜多見団地まつり
- ・どんと焼き準備
- ・あんしんほっとカフェ手伝い
- ・ピアノコンサート
- ・泉会バザー
- ・砧地域ご近所フォーラム
- ・尾山台フェスティバル
- ・ボランティア懇親会(3月)

- ・つなぐれ ひろぐれ ちいきの輪 in TOKYO(多摩川癒しの会にて参加)
- ・バス見学会(5月、11月)
- ・ボランティア団体との意見交換会
- ・あいさつ運動(毎月10日)

今年度も、博水の郷の行事・イベントに、年間延べ1285名のボランティアや地域住民の方にご参加いただいた。3月のボランティア懇親会では、多くの団体に参加いただいた。ボランティアの活動報告やボランティア同士の交流の場を提供することができた。

また、28年度は地域公益活動室と協働して、積極的に地域公益活動へ参加した。加えて、博水の郷地域交流室を、地域住民の活動のために利用できるよう整備を行った。

施設見学件数は、月平均約10件と前年度より増加した。急激な体調変化により、介護サービス自体の知識が薄いご家族が、対応に苦慮していることが多い。また、利用料の自己負担増により、多床室への入所希望が急激に増加している。近隣の新規開設予定施設は、ユニット型個室となっているが、実際の利用者ニーズとは一致していない。

次年度も博水の郷全職員が、地域に根差した社会福祉を目指し、積極的に地域のイベントへの参加や、施設からの情報発信を行う。

③ 相談援助業務の強化

ご利用者の満足度アンケートを年2回実施している。満足度は前期・後期共に85%となった。27年4月に介護報酬改定と8月に介護保険負担減額認定証の認定要件変更があったことで、利用料金への満足度が低下している。車椅子の手すりの交換や、座面クッションの入替など、ご利用者の生活に密着した必要性の高いものを修繕し、環境整備に努めた。

次年度は、清掃や居室空間に関する満足度の改善が急務である。ご家族にも面会時に協力いただき、清潔で快適な環境整備に努めていく。

今年度、相談支援室会議を月に1回定例開催した。施設サービス部長、相談支援課長、介護課課長、介護課副介護長、ショートステイ担当が出席し、各課の課題や利用率向上に向けての方策などの検討を行った。28年度は、介護課と協力して、高齢者虐待防止に関する研修を行った。

身体拘束廃止委員会において、虐待防止に関するアンケートを実施した。虐待につながるような言動や行動を防ぐために、職員の接遇マナーを向上させるように努めた。

次年度は相談支援室会議に看護課長も参加することとなった。各部署の業務分担を明確化し、サービスの向上につなげたい。

④ 医療機関との連携強化

28年度は、入院に空床は減少した。ところが、転倒事故による入院は増加した。そのため退院時の身体状況の把握を早めに行い、退院後の再度転倒しないように環境整備に努めた。

看取り介護を希望された利用者は前年度の12名から10名となった。退院時の状態把握と退院後の対応、利用者・家族の希望なども事前に情報収集し、退院後のスムーズな看取りケアにつなげた。入院中に医療行為が必要となり、療養型病床へ移動された利用者も4名だった。年々ご家族からの要望は多様化している。要望に細かく対応できるよう、積極的に情報収集し、病院からのカンファレンス出席の打診があれば、必ず参加していきたい。また研修などにより医療に関する知識を向上させ、ご利用者の体調管理を徹底して、入院による空床を減らすことを目標とする。

加えて、受診や入院とならないよう、初期症状が発症した時点で、施設往診医へ早めの相談、連携を依頼して施設内で対応できることを増やしていく。

(2) ボランティア受入状況報告

相談支援課長 矢野 弘枝

ボランティアの方には、一年を通して、施設と地域を結ぶ役割を果たしていただいた。また、利用者へ様々な楽しみや清潔な環境を提供するお手伝いをさせていただくとともに、開かれた施設づくりに協力いただいた。

博水の郷で行われるボランティア活動は多種多様である。喫茶コーナーでは、「さくらの会」「コスモスの会」「JOY 喫茶」「たけのこ喫茶」の4グループが、利用者へコーヒー、紅茶などの飲み物、お菓子を提供していただいている。楽しい会話と共に、憩いの場所となっている。紙芝居「ろくべい」は、月2回の活動で、紙芝居、歌で利用者を盛り上げ、楽しませてくれている。毎月プレゼントにいただく折り紙作品を、利用者は楽しみにされている。28年度は、ボランティア懇親会で活動報告をしていただき、他のボランティアの方々からも好評をいただいた。お馴染みの民謡・三味線「原田会」も、定期的に活動していただいております、各地の民謡を知るよい機会となっている。毎週月曜日に活動している傾聴ボランティア「もみじ」は、博水の郷で生まれた、温かみあふれるグループである。利用者は、日々の生活の中で感じたこと、若い頃の思い出、感情など、様々なことを話し、その言葉に「もみじ」のメンバーが寄り添って下さり、とても有意義な時間となっている。一部のご利用者インタビューし、自分史を作る「聞き書き」も行う予定である。そのほか、歌、音楽、絵手紙、華道、陶芸、書道など、各クラブ講師をしていただくボランティアも、馴染みの存在となっている。砧社協からの衣類のネーム付けボランティア、個人でネーム付けして下さる方も、ひと針ずつ心を込めて、ネーム付けをしていただいている。オセロ・将棋・マジックショー、シーツ交換の個人ボランティアも、利用者の状況を見ながら、活動いただいている。東京お手玉の会も、活動メンバーが増え、利用者とともにお手玉を楽しんでいただいた。今年度は「はのんの音」という音楽療法と体操を組み合わせた活動も開始している。

施設の一番大きなお祭りである文化祭も、利用者の作品制作を、各クラブの講師としてご協力いただいた。各ボランティア団体には、利用者の付き添いや、模擬店での手伝いをお願いした。加えて、今年度も世田谷総合高校学生の部活動作品や、らる保育園園児の作品をお借りして展示した。ボランティアの皆様にお祭りの雰囲気をも盛り上げていただき、地域住民の方の参加も増え、大盛況に終わった。

例年通り各グループとの定期的な意見交換会や、ボランティア懇親会も開催した。ボランティア懇親会では、多くの団体に参加いただいた。ボランティアの活動実践報告もしていただくことで、ボランティア同士の交流が広がった。加えて、今年度出来上がった法人パンフレットも活用し、博水の郷の施設利用説明を行った。今後も色々なご意見を参考に、地域に寄り添う福祉の実現化をめざし、施設から情報発信も行っていく。

今後もボランティアの方々とともに支え合い、助け合い、励まし合いながら、利用者の生活に潤いを与えていきたい。

3. 看護課

(1) 看護係 事業報告

看護課長 池内 祥子

最重点課題として感染症の拡大防止に取り組んだ。結果、インフルエンザの発症はショートステイの利用者数名、職員数名の感染があったが、拡大は防ぐことができた。28年度のインフルエンザは全国的にも罹患率が高く、集団発生の報告も多かったことから、職員の感染予防の取り組みが徹底されていたからこそその結果であると考え。集団で生活する高齢者施設では「基本対策の徹底」がポイントとなる。しかし、全員で取り組まなければ、その効果は限定的となる。スタッフ一人ひとりがしっかり感染対策を遵守できる新人教育の体制を整えたいと考える。

誤嚥性肺炎については、今年度は重症に至るケースが少なかったため入院日数が短く、また入院者総数も減少した。口腔ケア、嚥下体操、食事時の体位や食形態の選択等に取り組む、努力した結果と言える。認知症高齢者は、認知症が進むほど口腔内の状態が悪化するため、特に口腔ケアは重要な対策である。年齢を重ねて日々の生活が変化していく中でも安全で快適な食事・口腔ケアを提供することで栄養状態が改善し、全身的な抵抗力の低下を抑えることができるため生活の質の維持向上も見込まれる。今後も歯科衛生士等と情報を共有し、多くのスタッフが口腔ケアに精通した現場に成長できるよう取り組んでいきたい。

2025年問題もさらに近づき、看取りの体制整備が話題になっている。現在は病院死が8割、在宅死は1割強となっている。当施設での看取りは今年度10名と入所者の1割強であった。

今後も重度化や超高齢者が多くなり、また、病院での受け入れ困難により、看取りケアは増加すると予測される。経験の少ない介護職員の不安を軽減できるようにマニュアルの整備を行い、多職種との連携を図る必要がある。良い看取りをするためには看取りの時期だけではなく、安定期、終末期など、その都度、ご利用者・ご家族と向き合い、願いに沿った、苦痛のない丁寧なケアを多職種で展開していくことが重要である。自然経過として死にゆく過程を見せることで、むしろ命の尊厳を実感でき、残されたご家族が現実を受け入れることができるよう支援していきたい。

今年度は褥瘡の発生が多かった。重度化により寝たきりのご利用者も多く、難治のケースも少なくない。日々の観察により、リスクの高いご利用者のアセスメントを実施し、早期にプラン変更をすることで予防ケアの充実を図りたい。

(2) 栄養係 事業報告

管理栄養士 川人 恵美

食事の条件は、咀嚼・嚥下状態、栄養状態、身体機能、疾病、食への関心、嗜好など、ご利用者ごとに様々であるが、皆様が出来る限り平等に食事を楽しんでいただけるよう個人に合わせた食事の提供を行った。

主食・副食共に多くの食形態を用意し、個人の体調や状態に適した食事を提供した。主に刻み食の方を対象とし、飲み込みやすく、見た目にも食事を楽しんで頂ける形態として、ソフト食の対応を行った。手の不自由なご利用者には自助具を用意した。また、糖尿病や貧血、心臓疾患等の疾病があるご利用者には医師の指示のもと、療養食を提供した。

食べる事の楽しさを感じていただけるよう、ご利用者の嗜好や意向を取り入れた献立を作成した。四季の行事については、旬の食材を用い、彩りや盛り付けを工夫することで目的に合った行事食を提供し、食事を通して季節を感じて頂けるよう心がけた。また、バイキングや海鮮ちらし寿司など、行事以外にもイベント食を盛り込み、さらに、ポスター掲示等の事前告知をする事で食事への関心を高め、食事をより楽しんで頂けるよう心がけた。

栄養ケア・マネジメント（栄養スクリーニング・栄養アセスメントから栄養ケア計画を作成し、栄養ケア経過記録・モニタリングより、再び栄養スクリーニングへと繋がる、継続的な栄養状態の観察と改善）を実施した。多職種協働で個人の栄養状態・嚥下状態を把握し、状態に見合った食事の提供により生活機能を維持し、安心した生活の基盤になるよう心がけた。

4. グループホーム課

(1) グループホームやまぼうし

グループホーム課長代理 山田 浩

① 概況

今年度でやまぼうしは開設 12 年目を迎えた。

今年度の入退所は 1 件であった。平均年齢 88.2 歳、平均介護度は 2.25 と前年度より上昇しているが、家族・主治医・「訪問看護ステーションさぎそう」との連携を密に行っているため、大きく体調を崩される方もなく、みなさん活動的に過ごされている。また、感染症の罹患者は 0 名であった。

稼働率は、98.8%と前年度より向上している。要因としては、特養と連携をして、退所から入所までの期間を短縮できたことである。また、往診医、訪問看護ステーションと連携し、入居者の体調管理を徹底したことにより、1 年間の入院者が 0 名であったことも大きく影響している。

今年度は、用賀あんしんすこやかセンターが毎月 1 回開催している認知症カフェへの協力、参加を行った。ポスターの掲示やチラシ配り、お茶菓子用のクッキー作り等、開催前から準備にかかわり、当日も入居者含め参加し、地域の方々と交流を楽しんでいる。

② 入居者へのサービス

主治医は入居者 9 名中、「千歳台はなクリニック」の方が 4 名「ふくろうクリニック」の方が 2 名いる。往診時に職員が日常の様子を伝え、指示を受け、対応を行っている。必要時には家族と連絡を取り協力を仰いでいる。他の 3 名は家族が付き添い、かかりつけ医に定期受診にしている。

週 1 回の訪問看護ステーションさぎそうによる健康チェックを継続している。看護師の訪問の際には入居者の様子を伝え、指示を受けている。体調に異変があった時には家族・主治医に連絡し対応を行った。

個別支援に関しては、年 2 回モニタリングを行い、本人のニーズに沿ったケアプランを作成しサービスを実施している。地域の一員という視点で、できる限り地域との関わりを持つ内容のプランを立案した。

③ 事故件数と内容

今年度の事故報告は 0 件であった。ヒヤリ・ハットは 21 件となった。前年より 2 件減である。ヒヤリ・ハットの中では尻もちが 17 件と最も多い。毎月の職員会議で振り返りを行い、対策案や介助方法を検討し、統一した介助を行うよう心掛けた。

④ 家族との信頼関係の構築

毎月作成している家族通信にて、入居者の様子を伝えてきた。また、緊急を要しない連絡にはメールを活用し、家族の負担を減らした。

家族通信で参加を呼び掛け、クリスマス会に 13 名の家族が参加した。

入居者の誕生会は事前に家族と相談し、できる限り家族が参加できる日程で開催した。家族からの希望があったからである。

家族会代表は 1 月から任期を 1 年とし持ち回りで担当していただいている。隔月に開催する運営推進会議へ出席していただいている。年 2 回開催する家族会にてご家族からの要望をお聞きしており、懇親会も行いコミュニケーションを図っている。

8 月に満足度調査を行い、結果について職員会議で話し合いを行った。

⑤ 地域との関係

奇数月、年6回運営推進会議を開催した。やまぼうしの活動報告を行い、助言をいただくことで運営に活かしている。また、玉川四丁目町会や泉会の行事予定を確認し積極的に参加した。

運営推進会議では、年1回用賀あんしんすこやかセンターが主催のいきいき講座を開催し、地域の方も含め24名が参加した。また、9月に懇親会を行い、入居者・家族・運営推進会議メンバー・ボランティア・職員が参加した。家族には地域の運営にかかわっている方を紹介し、入居者の生活にはさまざまな人がかかわっていることを知ってもらう機会となった。

ボランティアは現在、おおぎり会が毎月1回手芸等を行っている。その他に茶道、紙芝居のボランティアが月1回の活動を継続している。今後は傾聴ボランティアや散歩のボランティアを募集し、個別対応を充実させたい。泉会のバザーに参加し、コーヒーマーカー等を貸し出すなど交流を図った。また、今年度からの試みとして、やまぼうし主催のバザーを開催した。地域の方にたくさん協力していただき、大盛況であった。バレンタインデーには入居者がクッキーを焼き、日頃よりお世話になっている商店街の方々に感謝をこめて配った。

地域における公益的な取り組みとしてシティコート二子玉川集会室で、地域交流会を開催した。内容として、6月には防災食試食会を開催し23名の方が参加された。3月には春のお茶会として、ボランティアに協力してもらいお茶会を開催した。32名が参加した。

(2) デイサービスやまぼうし

グループホーム課長代理 山田 浩

① 概況

共用型認知症通所介護を開設し9年が経過した。

28年度3月末日の時点で登録者は3名となっている。多い時には5名登録があったが、やまぼうしへの入所や、他グループホーム・特養への入所、病気や怪我による入院による利用中止が多く、安定した稼働をおこなうことができなかった。来年度も営業活動の強化、やまぼうしの周知に努め、利用率の向上に努める。

② 利用率の向上

利用率向上に向けての取り組みとして、認知症カフェ、地域交流会、バザーにて、地域の方に共用型認知症通所介護について説明を行った。また、認知症や福祉のことでお悩みの方がいつでも立ち寄れる相談所であるということを周知するため、看板を設置した。ホームページに空き情報や日々の様子を随時更新し、最新情報を地域に提供するよう努めた。結果、閲覧しての問い合わせも数件あった。運営推進会議で、利用者紹介の呼びかけや、近隣の居宅支援事業所への営業活動を継続した。また、入居希望の見学者へのデイサービス利用を勧めた。

③ 事故件数

今年度は事故「0」を達成した。

継続できるよう、今後も気をつけていく。

④ 利用者へのサービス

到着時に血圧・検温測定を必ず行い体調管理に努めた。

やまぼうしで楽しく過ごしていただけるように、手芸・歌などの個別メニューを考え、サービス提供した。来年度もデイ利用者が興味を持てるアクティビティを考えていきたい。

⑤ 地域とのつながり

独居のデイ利用者がサービス時ではなかったが、一人で外出していたところを近隣の方がやまぼうしまで送り届けてくださった。やまぼうしを知っていたとのことで、広報活動の重要性を強く感じた。

⑥ 担当ケアマネとの連携

サービス担当者会議へ積極的に参加した。

ご利用者ご家族の要望を随時確認し、ケアプランに沿った対応を職員会議や連絡ノートで全職員に周知し、適切なサービス提供を行った。